

三十八万キロ先のお隣さん

沖縄県立八重山商工高等学校 二年 漢那 樹理

沖縄県よりも南に位置する、私が住んでいる石垣島。昼間はギラギラの太陽に照らされ、サトウキビ畑とエメラルドグリーンの海が目に焼きつくほど鮮烈だったこの島が、夜になると別の惑星に来たかのように様変わりする。空気は澄み、星はくつきり輝き、そして何より、月がとても大きく見えるのだ。

石垣島の空は空気中の水蒸気や浮遊物が少ない。だから、月の光が濁ることなく、ダイレクトに網膜を貫通する。そんな澄み切った空が八重山諸島を星空保護区に認定させた。光害が少なく、夜空が人間の文明に邪魔されず、本来の姿を取り戻している。

しかも視界を遮る高層ビルなんてものは存在しない。地平線のすぐ上から月が昇ってくる様子に、宇宙への扉がそっと開かれるような感覚を覚える。そんな完璧な観察環境の中、私はこの月を肉眼で見るだけじゃ物足りなくなっていた。私はお父さんに買ってもらつた望遠鏡を持ち出した。接眼レンズは四十五倍。月の位置を見ながら自分なりに望遠鏡を動かし、ピントを調整して見た瞬間

「ハーアー!! やっぱ!」

と心の声が漏れた。そこには、ただの満月じゃない、地形があつた。クレーター。山脈。谷。まるで本当にあの地面に立っているかのような立体感。表面の凹凸がリアルすぎて、テレビや写真で見る平面的でどこか遠く感じる月ではなく、立体的な現実の地形としての月を初めて知つた気がした。特に印象的だつたのが月の下にあるクレーター。後で調べてみると、それは「ティコ」と呼ばれる直徑八十五キロの巨大クレーター。一億年前に形成されたもので、月面の中では比較的新しい。遠くから見るとただの白い斑点。でも望遠鏡のレンズ越しでは、そこには壮絶な衝突の痕跡、飛び散つた物質、削れた地層の記録がそのまま残つていて。つまり、あれは物理の証拠なんだ。月の模様がどう形成され、どんな歴史をたどつてきたのか、その一部がここに刻まれている。

月は地球から約三十八万キロメートルの彼方に浮かんでいて、私たちが見ている光は、約一・三秒前にその表面を跳ね返ってきたものだ。私たちはちょっと過去の月

の光を見ている。光速という宇宙最速のスピードですら、三十八万キロを進むのに一秒以上かかる。そう考えると、宇宙ってのはとてもないスケールの世界なんだって、身をもつて感じた。石垣島の空の下で見上げる月は、ただの夜空の飾りじゃない。宇宙の入口そのものだった。そこには歴史と科学と時間と、自分の中の好奇心が全部詰まっていた。

月はいつも、黙つてそこにいる。何かを語るわけでもない。でも、見る人によつて、映るもののが違う。誰かにとつては恋の記憶。誰かにとつては航海の目印。私にとつては地球外天体の第一歩だった。

しばらく見入つていると、不思議な感情が湧いてきた。こんなに近くにあるのに、私たちは月のことをどれだけ知つてゐるんだろう？ 地球のすぐそばを回り続けていふのに、裏側には今も人類が足を踏み入れたことのない場所がたくさんある。月は宇宙規模で言えばお隣さん。でも、そのお隣さんはまだまだ謎に満ちている。たとえば、月はどうやってできたのか？ 裏側と表側でなぜ地形が変わつてゐるのか？ そんな問い合わせ前にすると、胸の奥がざわつき始める。まるで何かが目覚めるように、静かに、でも確かに熱を帶びていく。

月を見上げるたびに思う。私たちは地球という星の上で、重力に縛られながら生きている。でもそのすぐそばに、地球と絶妙なバランスで引き合い続けている月がある。潮の満ち引きを引き起こし、自転の安定を保ち、地球に欠かせない存在であるながら、見れば見るほど、誰とも交わることのない孤高の存在として、静かに、そしてどこか哀しげな神秘を身にまとつてゐるようを感じられた。それが私たちの最初の宇宙的ご近所さん。

宇宙の入口に立つよう、この夜空の下で曇つていなければ私は望遠鏡を通してお隣さんを見ている。ただの点じゃなく、そこには世界があり、記録があり、そして可能性があつた。そして思う。この宇宙には、まだ解かれていない謎が無数にある。それを解明するには、ほんの少しの観察と、果てしない好奇心、そして科学が必要だ。あの月が教えてくれたのは、目の前にある当たり前の奥にも、驚きが潜んでいるということだった。